

●J.S.BACH/フランス組曲第6番より
Allemande,Courante,Gavotte,Polonaise,Gigue

ヨハン・セバスチャン・バッハ（1685-1750）は18世紀のドイツで活躍した作曲家である。バロック音楽の重要な作曲家の一人であり、鍵盤楽器の演奏家としても高名だった。

バッハは6曲の「フランス組曲」を書いている。バッハ自身は「クラヴィーアのための組曲」と名付けており、「フランス組曲」なる命名者は判っていない。おそらく、この組曲が優雅で親しみやすく洗練された音楽になっており、フランス的な感覚が盛りこまれているためにこう呼ばれるようになったものだろう。

アルマンドはフランス語でドイツという意味の語で、4分の4拍子、上拍に始まる。落ち着きを保ちつつ淡々と途切れることなく進む舞曲。

クーラントはやや速いテンポの活発な舞曲で、フランス式では2分の3拍子もしくは4分の6拍子、イタリア式では4分の3拍子もしくは8分の3拍子である。

ガヴォットは、フランスに生まれ上流社会で流行した明るく快活な舞曲。通常4分の4拍子で、第3拍目から始まる。

ポロネーズは荘重でゆったりした4分の3拍子で、第1拍が16分音符で細分されているのが特徴であるが、初期のものは必ずしもこれに従わず、2拍子のものもある。もとは民俗的なものでなく貴族の行進から始まったといわれ、16世紀後半にポーランド王国の宮廷で行われたという。スウェーデンの民族舞踊「ポルスカ（Polska：スウェーデン語で「ポーランドの」の意）にも似たものがあり、これはスウェーデン王を兼ねたポーランド王ジグムント3世の時代に始まるともいう。その後、ヨーロッパ各国の宮廷に取り入れられ、フランス宮廷からポロネーズの名が広まった。

ジグはイギリスを発祥とする軽快で速い舞曲。本来の拍子は8分の3、6、12のいずれかだが、バッハは4分の4で1拍を3連符に分割して記譜することもあった。

●Debussy/二つのアラベスク

クロード・ドビュッシー（1862-1918）は20世紀音楽の成り行きにもっとも強力な影響力を持ったひとりであった。彼の様式のひとつの側面は、印象主義という用語に要約される。印象主義とは19世紀後半のフランスに始まった、絵画を中心とした芸術運動の事で、その代表的な人物がクロード・モネClaude Monetであった。印象主義の音楽といえば、感情を表出したり、物語を語ったりするのではなく、或る気分、束の間の情、或る雰囲気、を喚起するものである。

ドビュッシーの様式の形成には、若い時期に受けた様々な影響が関わっている。直接の背景となったのは、フランク、サン＝サーンス、そして、既知に富む独創的なエマニュエル・シャブリエEmmanuel Chabrierらであったが、同時代の画家や詩人も、少なくとも同程度の強い影響を彼の思考に与えた。

2つのアラベスクはドビュッシーの初期のピアノ作品で、第一番と第二番の二曲で構成される。アラベスクという言葉の意味はモスクの壁面装飾に通見られるイスラム美術の一様式で、幾何学的文様（しばしば植物や動物の形をもととする）を反復して作られている。

第一番は、分散和音が幾何学的模様のように組み合わせたり、ロマンティックでみずみずしい世界が展開される。とても心地良い響きで、息の長いメロディが続く。

第二番は、第一番の長いフレーズとは違って、細やかな一拍ずつの速く短い曲線が描かれている。アラベスクの模様を表現しているかの様な右手の旋律はころころと可愛らしく、マリンバにも合っている。

●Chabrier/10の絵画風小品より第10番 「スケルツォ・ワルツ」

管弦楽作品である「狂詩曲『スペイン』」の作曲者として広く知られるシャブリエ（1841-1894）。実は作曲家として活動したのは約10年ほどと短く、40歳頃まではフランス内務省で働いていた。

「10の絵画風小品」は1881年作、「スペイン」（1883年）と同時代の作品であるが、いずれも1880年に作曲家の仕事に専念することを決意した直後に作られた作品である。

「10の絵画風小品」はピアノ独奏のために書かれた作品だが、その中から「スケルツォ・ワルツ」を含む4曲を抜粋して、作曲者自身がオーケストレーションした「田園組曲」という管弦楽作品がある。

原曲よりもさらに明るく色彩的な魅力にあふれ、展開の速さや軽やかなリズムからも、機知に富んだシャブリエらしさがつまった作品であることが再確認できる。

今回は、二台のマリンバが交互にメロディと伴奏を担当していく、ステレオ感のあるアレンジにした。

●E.Sammut/カレイドスコープ

パリ管弦楽団首席打楽器奏者でもあるエリック・サミュ。和音を分散させながらその中に点描のようにメロディーもものせる彼独特の書法は、マリンバの単音が減衰音であるからこそ移り変わる響きが美しく、マリンバの新しい魅力を生み出した人と言えるだろう。

エリックがアメリカで行われた、リー・ハワード・スティーブンス国際マリンバコンクールで一位を受賞した時に、彼は「ローテーション」という自作曲を演奏した。その曲はたくさんの人を大変感動させた。その温かい人柄と、独特のマリンバに合う美しいハーモニーは人気があり、今では彼の多くの作品が、マリンバの大事なレパートリーとなっている。

氏はインプロヴィゼーション（即興演奏）も得意とし、この作品の中にも「your own chorus」という指示による、指定されている和音の上で奏者が自由にメロディーを弾いて良い箇所がある。

カレイドスコープ（kaleidoscope）とは、英語で万華鏡の意味であるが、本作品の原題は、「kaleiduoscope」となっており、さりげないユーモアをしのばせる作曲者の人柄が伺える。

2人のハーモニーを調和させて、少しずつ表情を変化させる美しい万華

鏡のような世界を表現したい。

●酒井麻由佳/6つのノヴェレッテ —淡く、深く—

6 Novelettes —Softly and Deeply— (委嘱世界初演)

【作曲者の酒井麻由佳さんから頂いたプログラムノートをそのまま掲載させていただきます。】

MONET marimba duoから新曲委嘱のお話をいただき、構想を練りながらお二人の名前の由来でもある印象派の画家、クロード・モネの作品を改めて見直してみました。草花や海の香り、あたたかな風、降りそそぐ陽射しのきらめきなどを感じとることができました。そんな“空気をまとった絵画”のような音楽を作りたいと思い五線に向かいました。

作曲において心がけたことは、マリンバの親しみある可愛らしい音や、木が持つ自然で豊かな響きを生かすこと。そして、息の合ったアンサンブルで2台のマリンバがあたかも一つの楽器として聴こえるようにすることでした。

モネの作品を直接イメージしたわけではなく、その色合いやタッチからインスピレーションを受け、私が想像した情景を6つの小品としました。楽曲を聴きながら自由に想像を膨らませ、情景を思い描きながらお楽しみください。

どこかで見たことがあるようで見たことがないような景色...

1. 小舟 Shallow Waters

ゆらゆら揺れる水面。浅瀬に小さなボートが浮かんでいる。

2. 紫陽花色の空に Blue Moment

本コンサートのフライヤーの色にインスパイアされ生まれた曲。淡く、柔らかな優しい色合いの空。

3. 矢のように Catch the Wind

金色のたてがみがなびき、風を切って走る馬。矢のように。

4. 小さなワルツ Little Waltz

湖のほとりで、妖精たちが人知れず楽しく踊っている。

5. 月の浜辺で Bay of Love

月にある浜辺を歩きながら過ぎ去った恋に思いをめぐらす。

6. 光のパイプオルガン Angel's Stairway

天から降りそそぐ光。そこに祈りのうたが聞こえる。

※雲間から太陽の光がこぼれ、光線が見えることを天使の階段（天使の梯子）と言うが、宮沢賢治はそれを”光でできたパイプオルガン”と名付けた。その美しい言葉に触れて生まれた曲。

最後に、演奏会の機会が減ってしまったこうした状況のなか、委嘱の機会をくださり演奏してくれるMONETのお二人、コンサートの安全な開催に尽力してくださっている関係者の皆様、そして本日足をお運びくださり初演を見守ってくださっているご来場の皆様に感謝申し上げます。